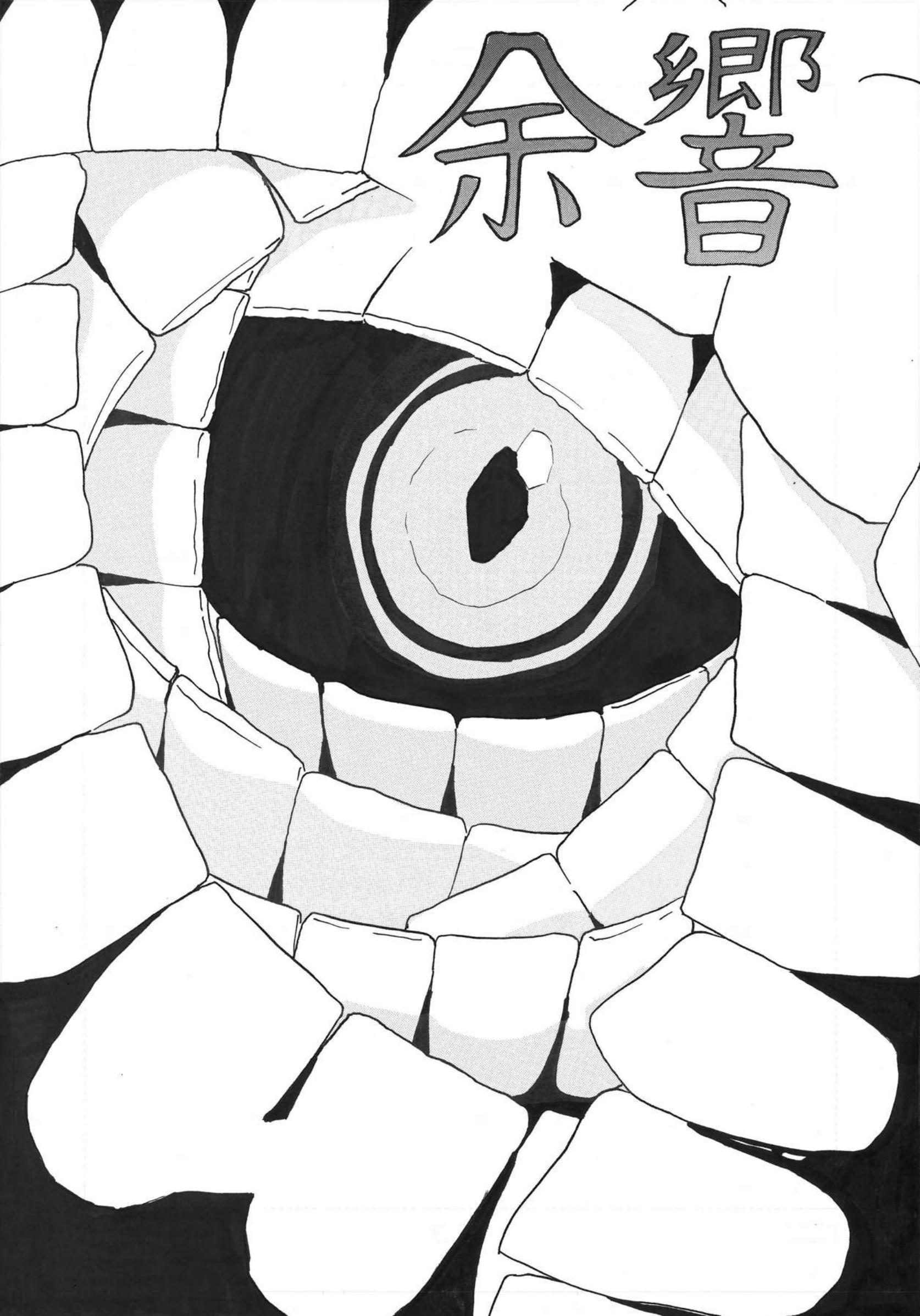


金鄉  
古  
董



七二三年

ミハマ先生!!  
こうちです!  
こうち!!

オーライ!!  
先生!!

お久しぶり  
で〜す!

つて…お!

ミハマ ヒロシ  
(地球人類)

何度も言つてる  
だらう?

先生じゃなくて  
博士だと:

おいおい:  
フーゴくうん



スージィちゃん!  
大きくなつた  
なあ!!

さあ  
出発だ

いや:私も  
今日はこの森の  
生態調査に  
ご協力いただき  
ありがとうございます!

先生!  
今日はこの森の  
生態調査に  
ご協力いただき  
ありがとうございます!

フーゴ  
(ガル人類)

ぱうっ!!

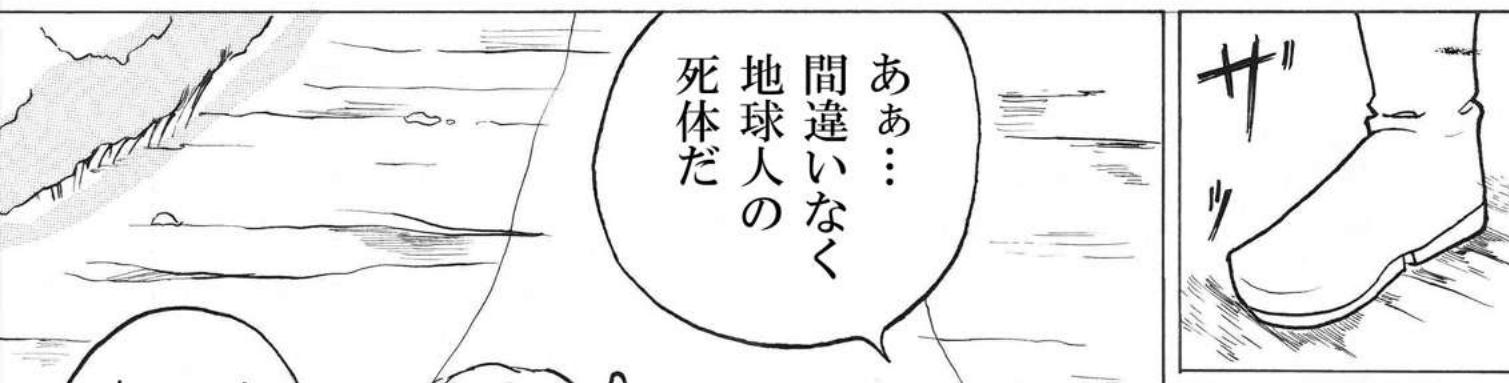
スージィちゃん  
(ポノコノ族)

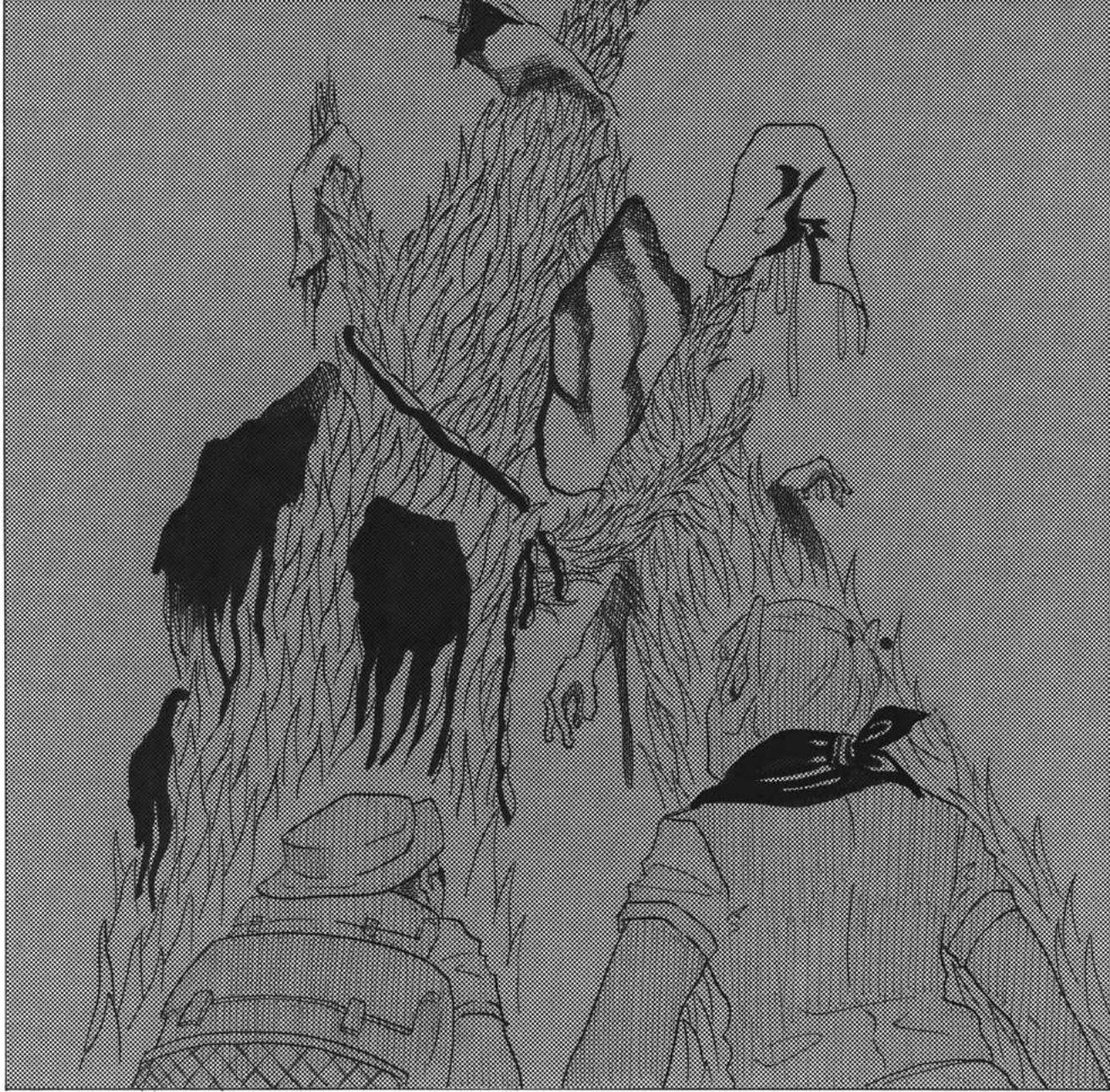


先生、今  
「戦争なんて  
馬鹿らしい」



オーライ !!  
スージィちゃん





六二五年

第三回ラグリアナ地方  
奪取作戦に参加

ガル植民星化計画  
開始に伴つて徴兵  
された兵士である

私はジャン・ベルナルド

仲間達は既に  
敗走していた

飛んできた頭によつて  
意識を失つていた私が  
目を覚ました頃

仲間が大勢  
無惨に殺された

現れた宇宙生物は  
予想よりも多く

絶対に…

私は生き抜いて  
みせる

一人で

つまり私は次の作戦で  
再び仲間がガルに来るまで  
待機していなければならぬ

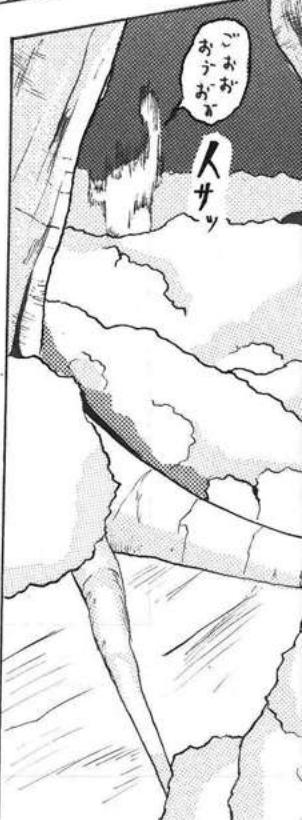
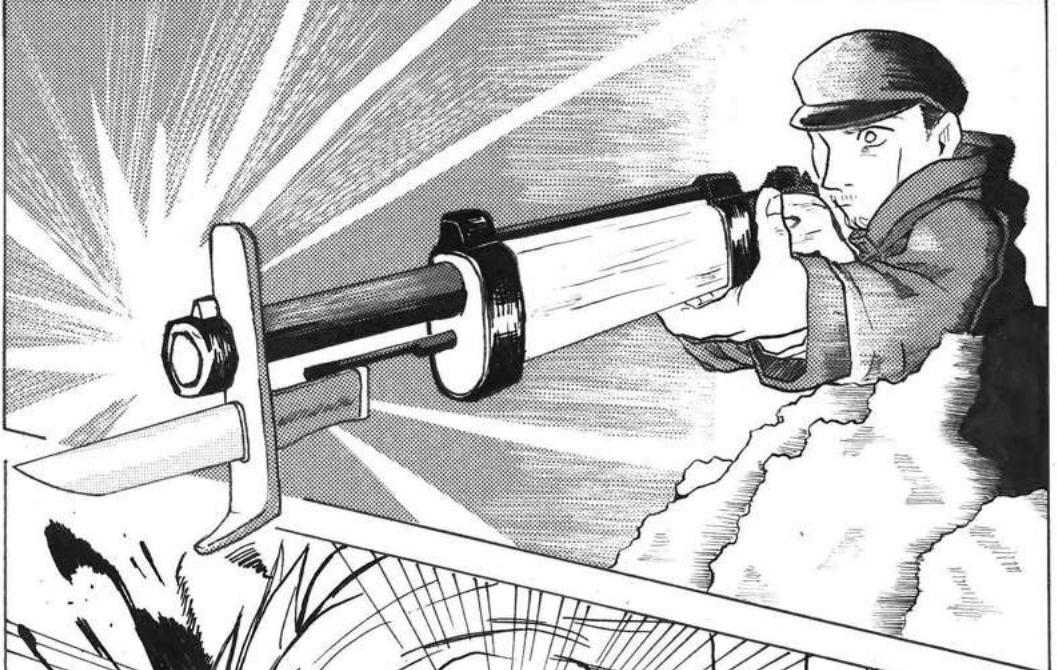
周りに生きている者は  
いなかつた





帰るんだ

必ず



五日目

俺は本当に生きて  
帰れるのだろうか

帰りたい

肉体的にも  
精神的にも

昨日の宇宙生物駆除  
から急激に疲労を  
感じるようになつた

七日目

帰りたい  
死にたくない

クソツ

何でこんなことに  
なつたんだよ!!

苦しい…  
腹が減った  
食料はもうない

幻覚も見る  
ようになつた  
最悪だ

…帰りてえよ

オレは

オレはある地獄で  
死んどくべきだった  
のか?

ああまま  
訳も分からず  
死ねたら

ああ…でも

死にたくないねえよ

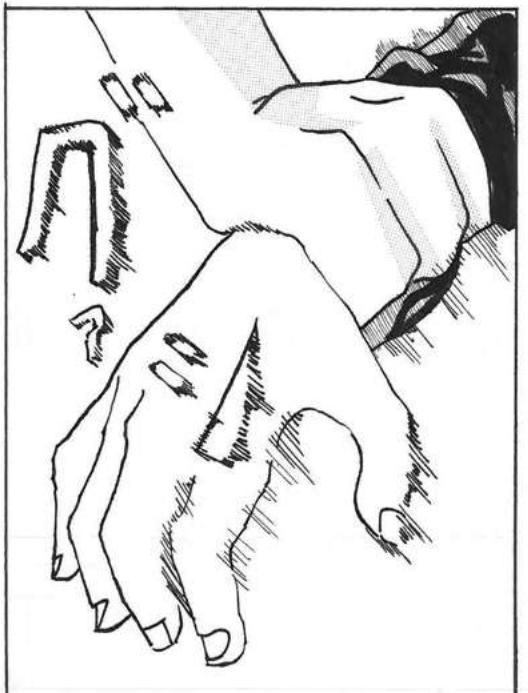


十二日目



はあ～





しなつ!?  
しまつた!!

クソツッ!!  
なんて力だ!!  
振りほどけねえ!!

アタタタタタ

一  
体

ど  
こ  
へ  
…

こ  
こ  
は  
…

奴  
ら  
の  
巣  
か  
つ  
!!?

ア

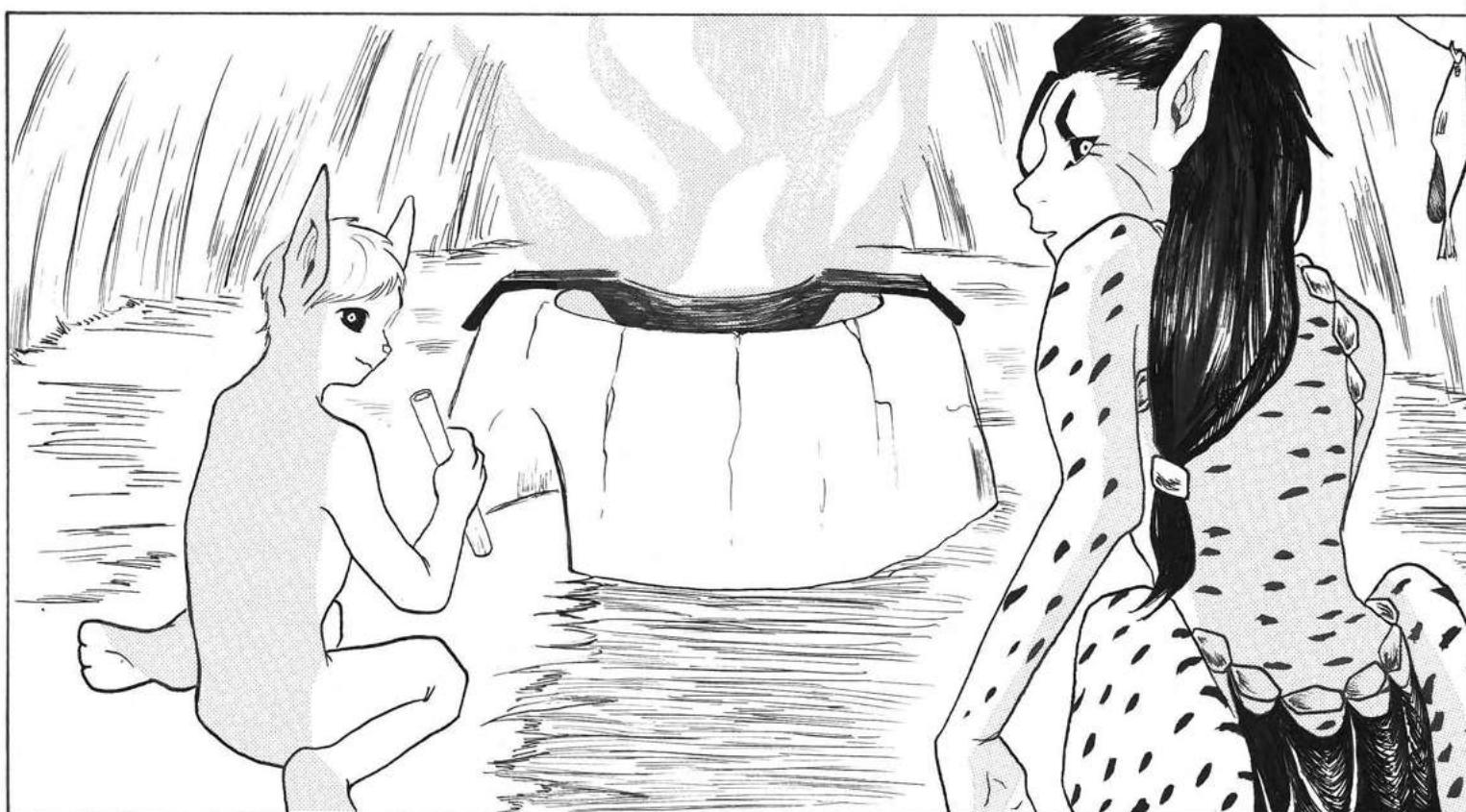
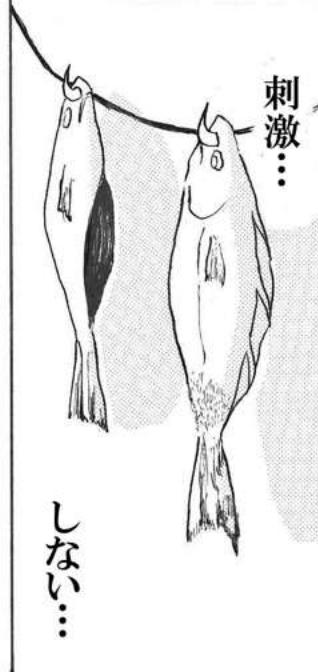
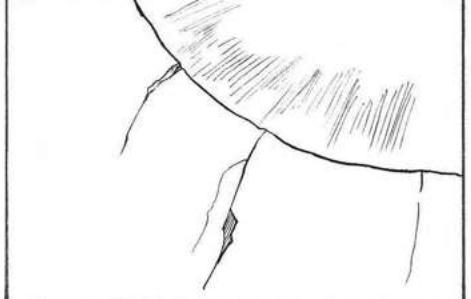
ア

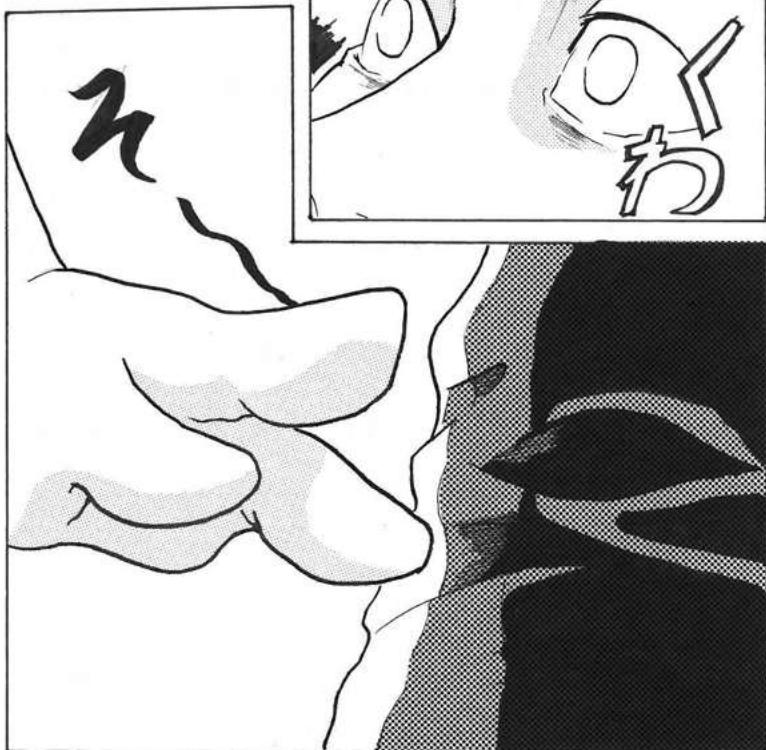
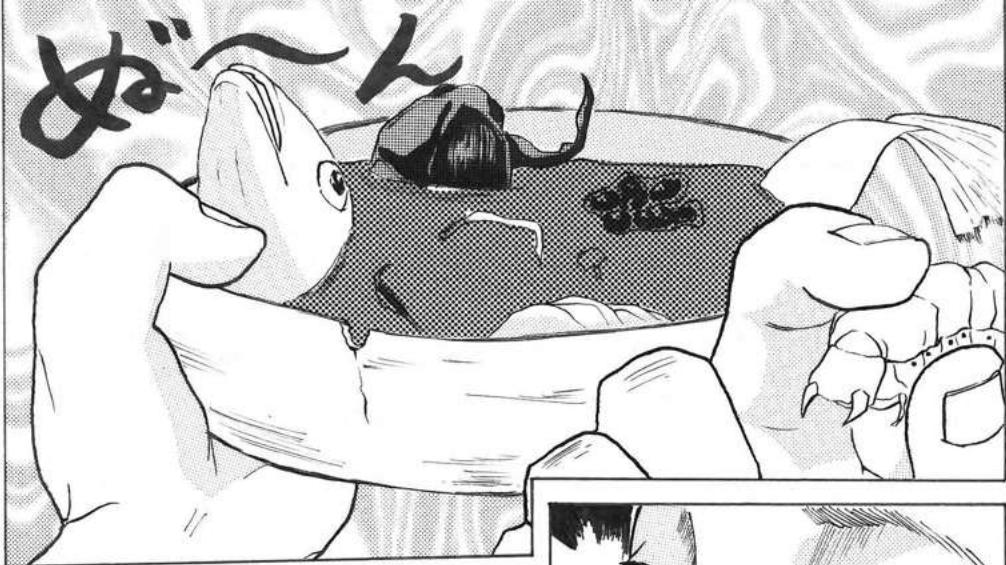
ア

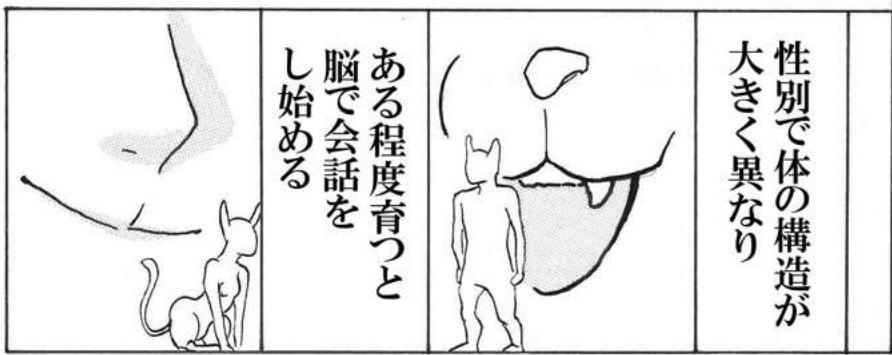
ア



刺激をしないように  
しなければ…!!







感情があり  
愛があり：  
人間と何ら  
変わりないのに

彼らには  
文化があり  
知性があり

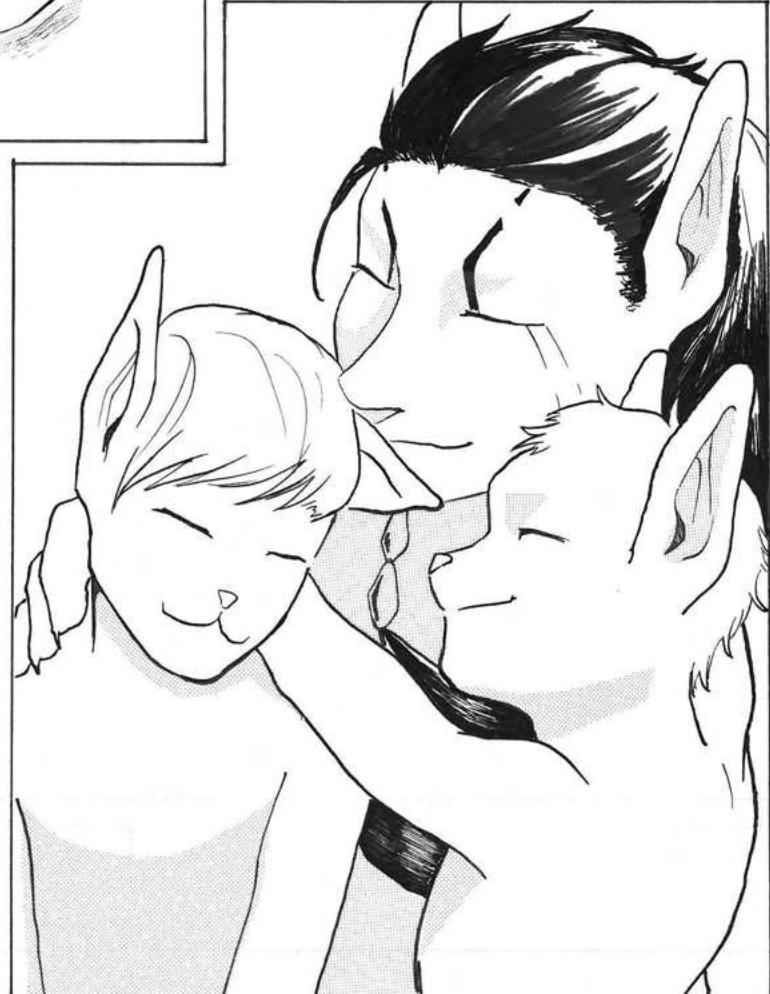
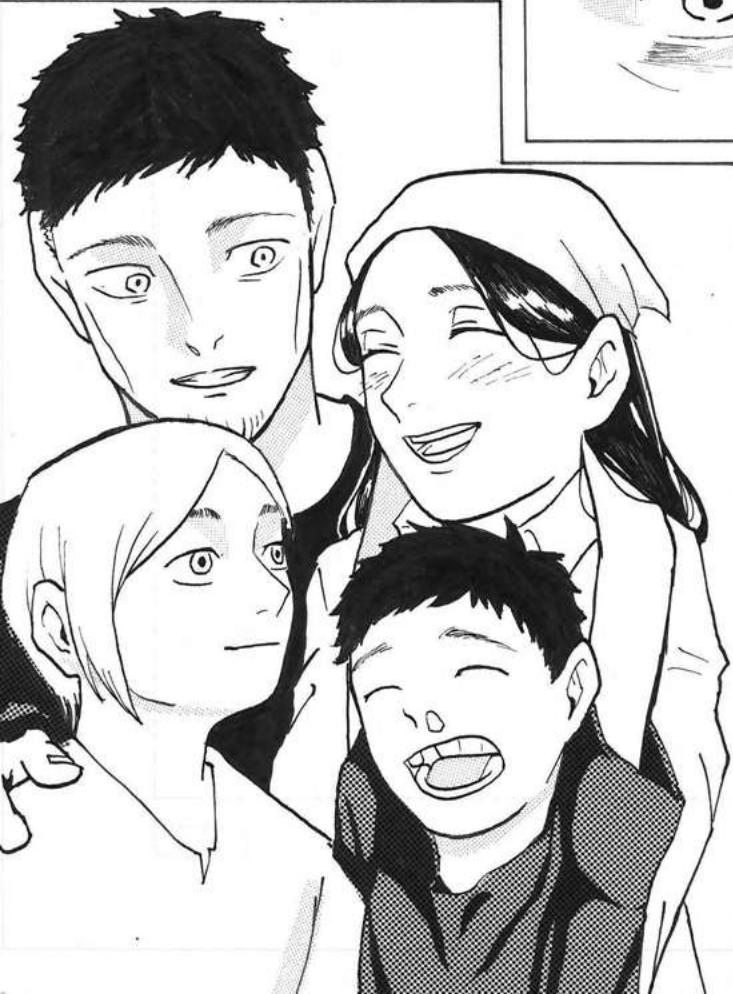
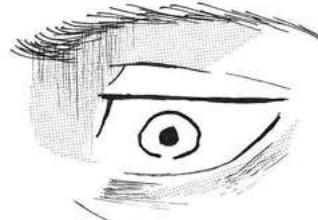
今思えば、国は何の根拠も  
無いでたらめをオレらに  
教え込んでいたんだな  
彼らのことを「凶暴」だの  
「野蛮」だの

兵士たちはただ  
害獣を駆除する  
感覚で

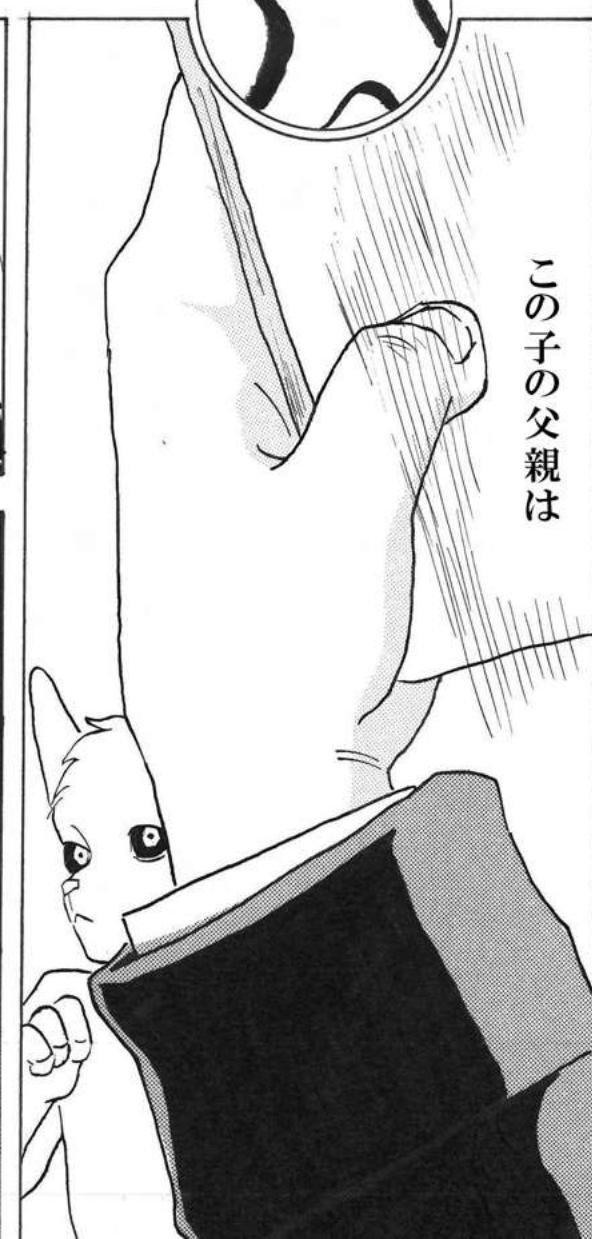
奪う前に  
気づけないのか

なぜ…

人を殺している



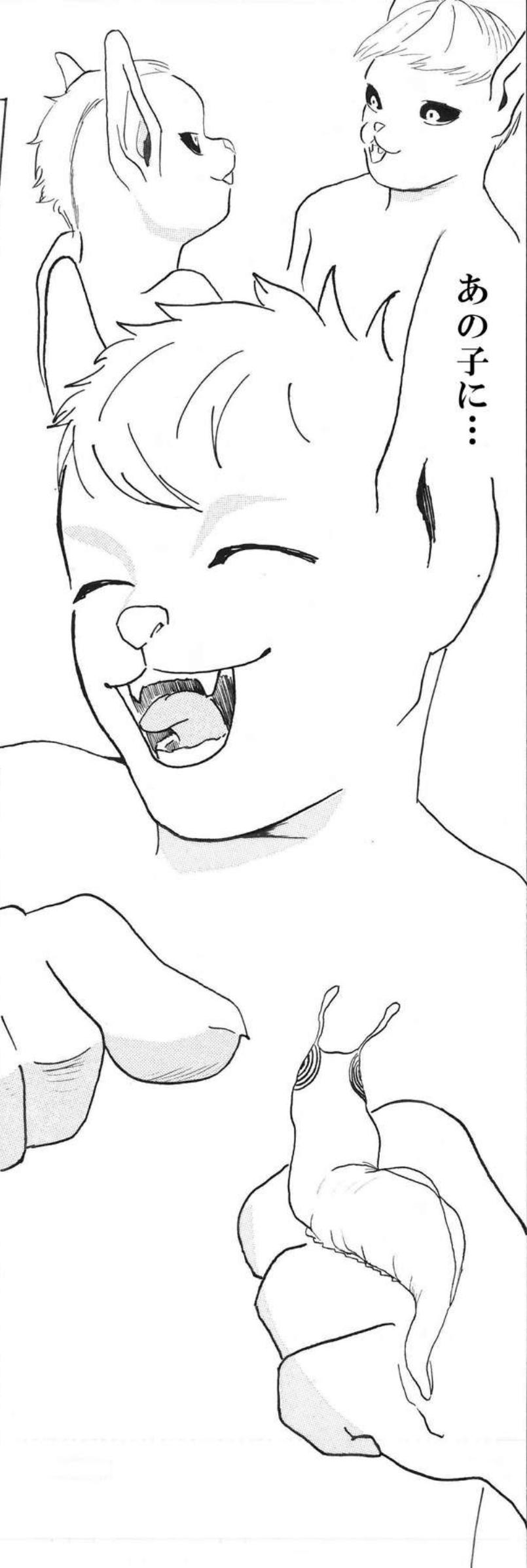
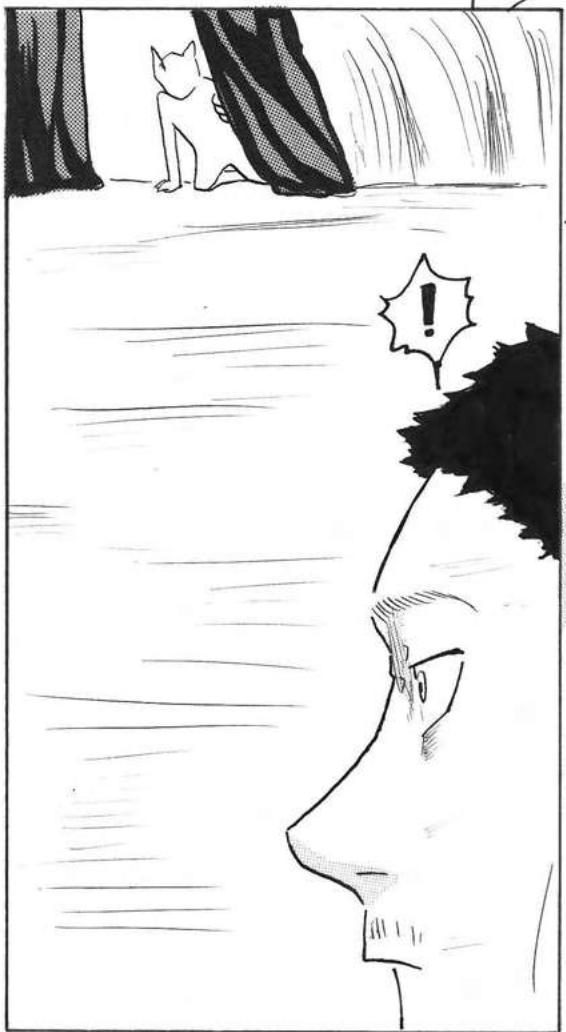


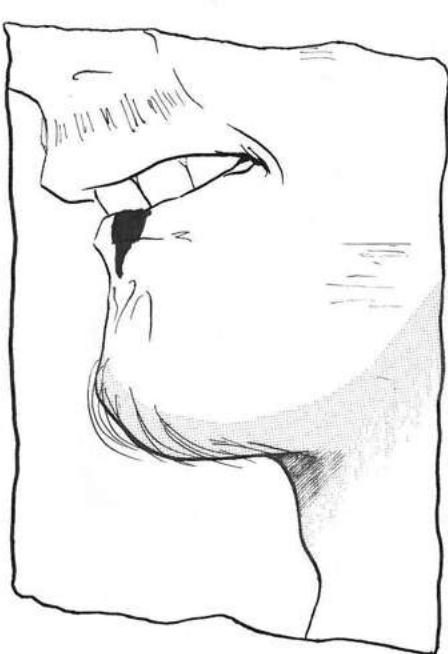
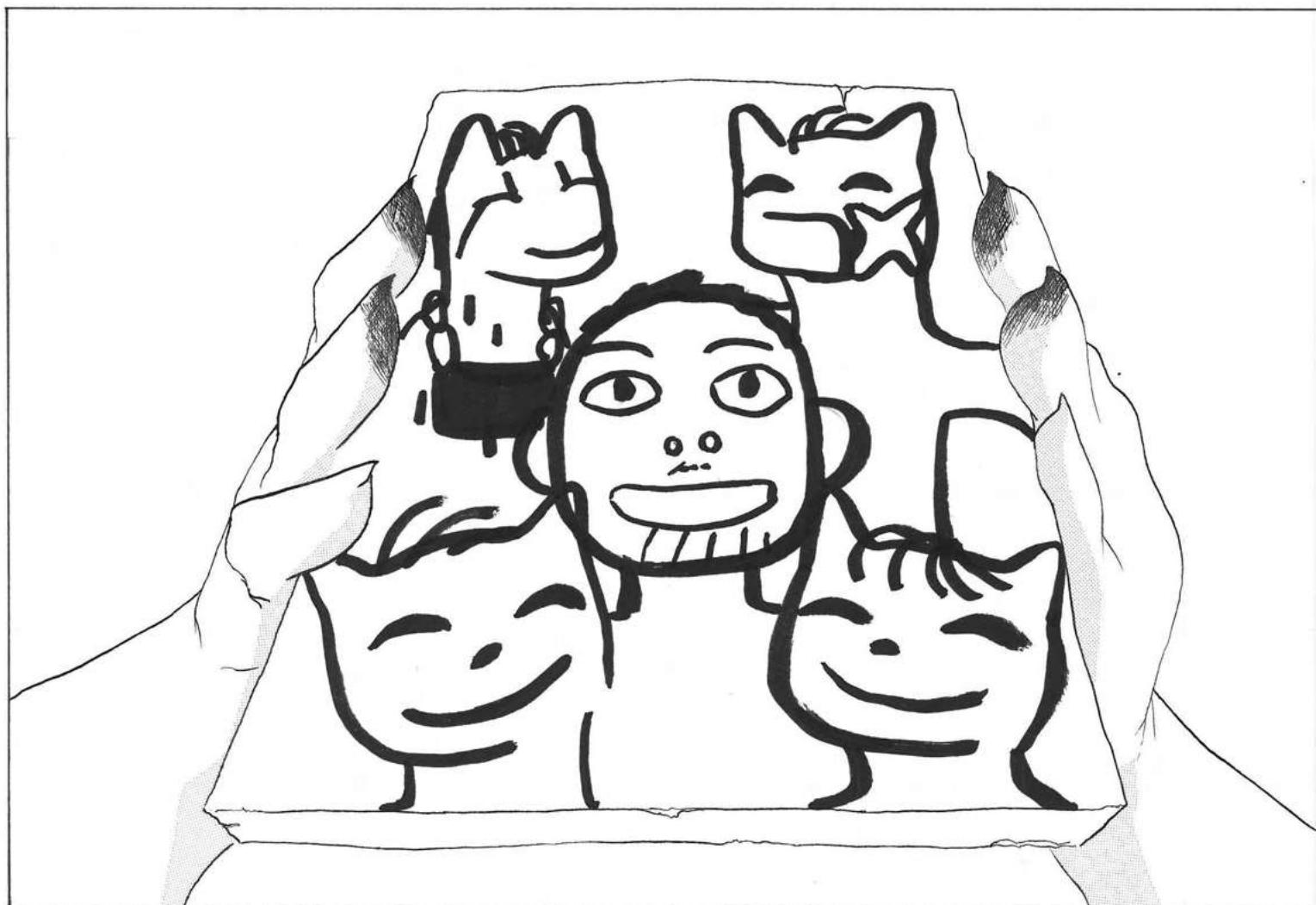


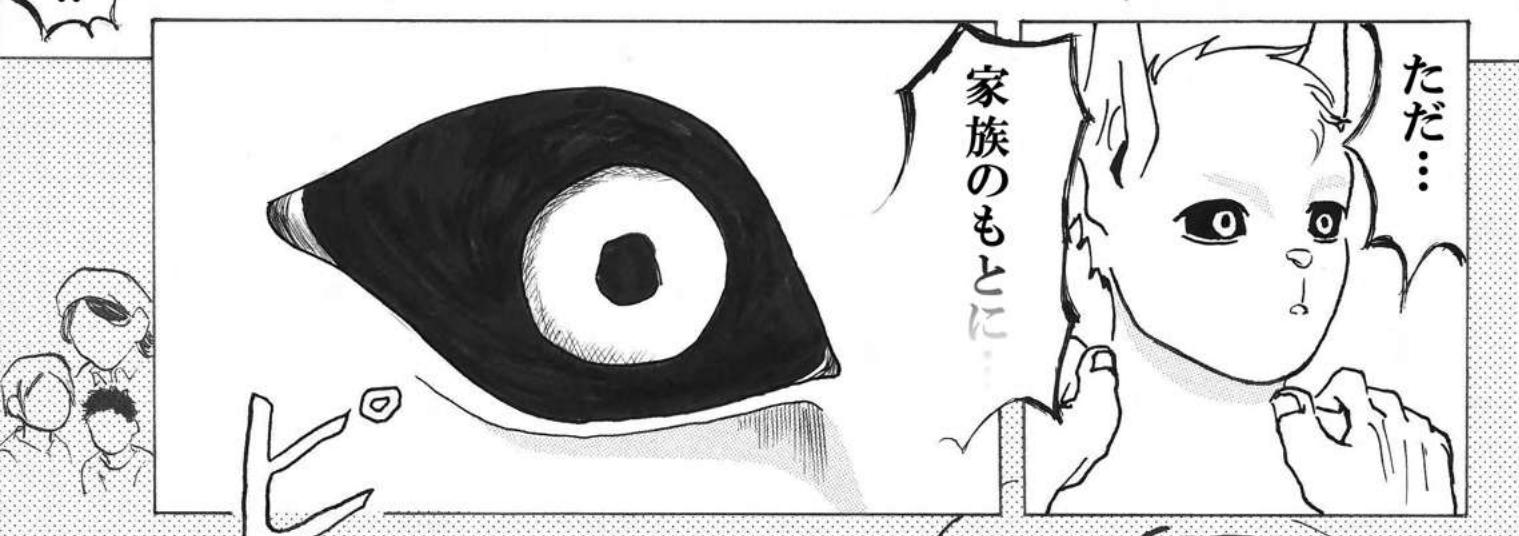


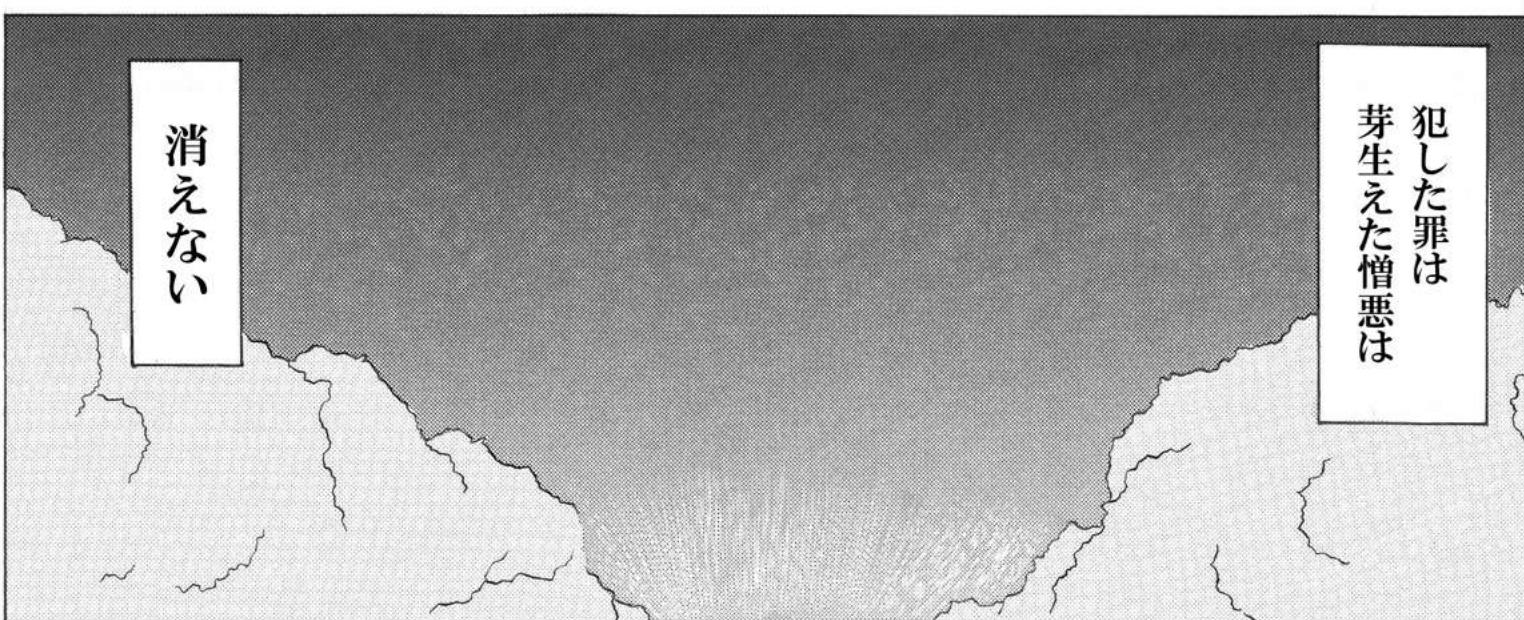
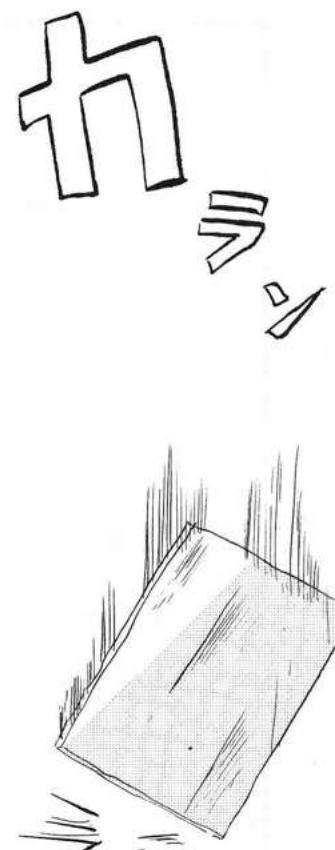
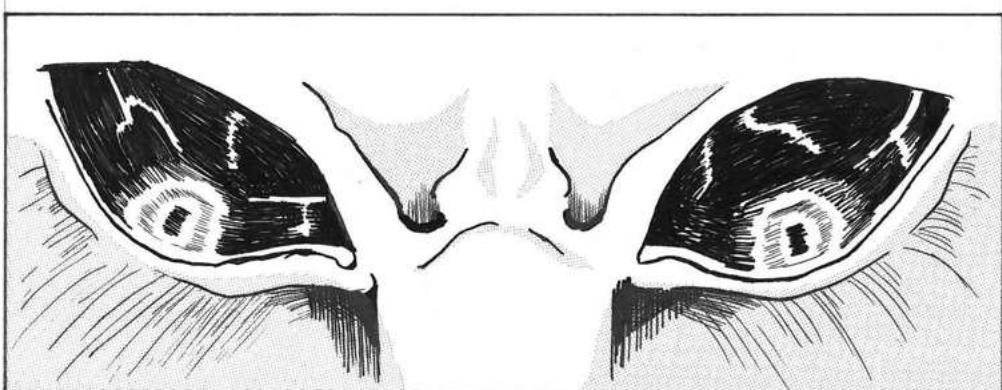
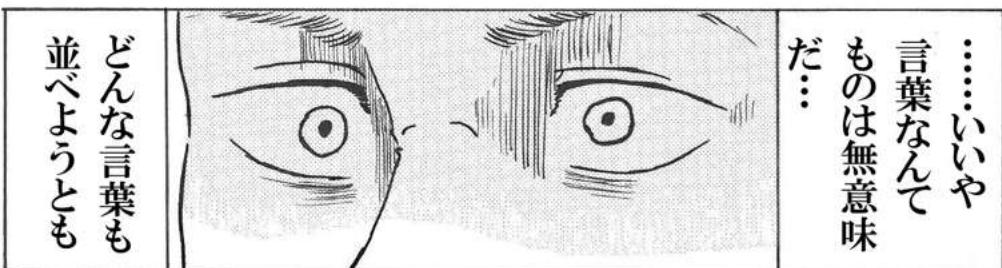


もう…人の親として  
生きていく自信がない  
人を殺しておいて  
のうのうと父親ヅラ  
なんて…











その表情は  
彼の死に様を

まざまざと  
告げていた

痛み 苦しみ  
悲しみ 後悔  
失意 恐怖

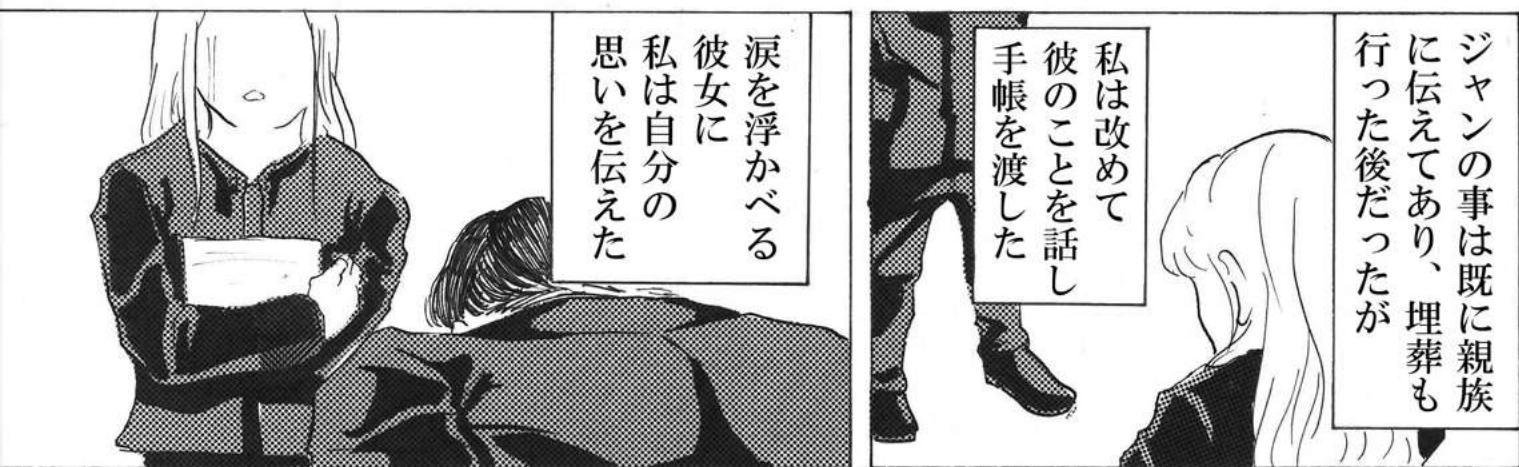
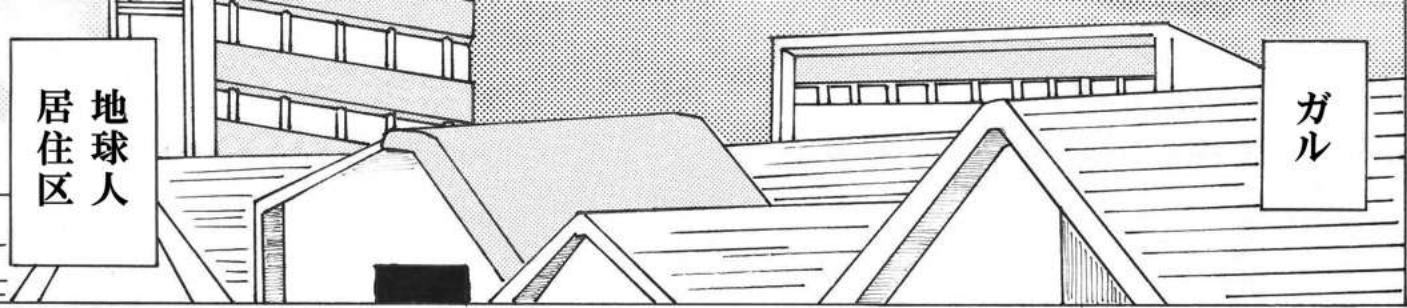
その余響が—

大丈夫  
ですか？

先生！

先生!!

つ  
!!?



彼女は笑つて

それは生物学者の  
私にとって初めての  
試みだった

物語を書くことは、  
論文を書くこととは  
違う

頷いてくれた



残したい

でも、止められない  
どうしようもない使命感が  
私を突き動かす

「余響」

人類の生活の  
片隅に

その本は何ら特別  
ではない唯の物語だ

しかし、それは  
いつまでも

余響を  
奏でている